

毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

山と博物館

第 7 卷 第 2 号

1962年2月25日



爺 ガ 岳

黒沢高原より

撮影 梶 泰 朗

大町山岳博物館

ムクドリ 雑感

佐野 昌男



ムクドリの巢 61.5 篠ノ井市にて

大学に入って分類を基盤にした私は、日頃ムクドリに興味を抱いていたので、主にその就時活動(ねぐらへ入る時の状況)を中心に研究してきた。こゝでは、それらの観察をもとに、ムクドリの色々な事について簡単にふれてゆきたいと思う。尚、この観察は、主に北信地方(善光寺平野)で行なった。

長野県では、地方によりムクドリとモズを混同して呼んでいるが、ムクドリは嘴と足が橙黄色、顔に灰白色の斑があり、羽は全体に灰褐色をしており、田植時期や柿の熟す時期に目立つ雑食性の社交性に富んだ鳥で、モズは高鳴きやはやにえでよく知られてる動物質食性の鳥である。鳥類図鑑によると、ムクドリは日本に於いて大多数漂鳥(季節の変化により日本国内を移動する鳥)であると記されている。しかし、本県に於いては、漂鳥と留鳥(一年中、同地域に棲息している)の地域がある。例えば、白馬村では10月中旬以後は全く観察されず、南へ10Kmいった大町地方以南では冬期でも数こそ減少しているが、多少観察される。北信地方に於ける信濃町や田口でも、冬期は全く観察されない。ところが善光寺平野に至っては、総数年間通して約1.5~2万羽位は棲息している。このように、約10Km離れているか、いないかにより、冬期も棲息していたり、いなかったりする最も大きな原因として考えられる事は、餌の有無にあるようである。田植時期がムクドリの育雛期に当り湿田は良き餌の供給地として大いに利用されており、それはかりか

全ての環境が餌場となるために晩秋から冬以外は、全県下棲息可能な地となる。秋も終り近くなると餌の大部分を占める虫も少くなり、もっぱら果物、特に柿がその対象となる。先の白馬村、信濃町、田口には、ほとんど果樹園もなく柿の木も育たぬ土地であるため秋以後全くその姿を消してしまうが、大町、善光寺平野では果樹園も柿の木も多く1月初旬頃まで実がついている。参考に、湿田と樹上(果物)での採食状況の変化を月毎に掲げると8~2月まで採食地環境の対象にならなかった湿田での採食が蕃殖期、田植時期の進行と共に全体の採食地環境の3月16.4%、4月22.2%、5月46.1%、6月45.8%、7月75.0%と次第に増加してくる。又2~8月まで0%に近かった樹上での採食は、秋の深まりと共に、全体の採食地環境の9月14.3%、10月41.2%

11月71.4%、12月50.0%、1月48.6%という変化を示している。この事からも秋から冬にかけては全体の40~70%も果物でまかなわれてるムクドリの棲息地として果樹のない土地は、不適当なのである。善光寺平野に於いても、果物がなくなり、虫などの最も少ないと思われる2~4月にかけては、地肌の現われている畑、果樹園、湿地、河原、ごみすて場などが採食地環境になるが、白馬村、信濃町、田口などは、12月には既に雪深くおゝわれてしまい地肌の現われている場所が全くなくなるため、二重にムクドリの棲息を不可能たらしめてるようである

最近、野鳥の減少という事が叫ばれているが、ムクドリも例外ではないと思われる。これは、昨日何羽居たのが今日は何羽に減ったというような問題でないため、詳しいデータがない限り、はっきりした事は言えないが、「20~30年前より大部少くなった」と50~60代の人々に言われてる事から考えても、減少してる事は確かであろう。ムクドリの最も良い蕃殖場所は、樹洞である。しかし、洞のあるような大木は、伐採される一方で、今では極く一部のお宮やお寺だけに限られてしまい、ムクドリも非常な住宅難にみまわれている。ツバメ、セキレイに並ぶ、この益鳥の代表種ムクドリは、巣箱にもすぐ馴じむ相当適応性の強い鳥なので、大いに保護増殖したいものである。

さて、巣に溢れた夫婦は、農家のぐしや瓦屋根を利用して蕃殖を初めるが、それでもまだまだ住宅難は緩和さ

れず、大きな蕃殖コロニーであればある程、そこへ集まる夫婦も多く、隙をみては、激しい巣の横取りごっこが演じられるのである。程度の差こそあれ、はや1月中旬からこの争いが始まり、産卵期に入り最も激しさが増し6月中旬から7月中旬頃まで続けられる。産卵期中の大きな蕃殖場所の近くには、巣の横取りごっこの犠牲になった卵が点々と散らばっており、既に3回ばかり侵入者が卵を持ち出す現場を観察している。このような巣の横取りごっこが続く、産卵期を経て、抱卵期に入った巣を調べてみると、ノーマルに蕃殖期が進行していった巣であれば5~6個の卵があるわけだが、7巢中、5個1巢4個1巢、3個4巢、2個1巢と抱卵数が非常に減少しており、孵化率、成長率は、更に低下するものと思われる。これだけでムクドリは減少を断定する事は、はなはだ危険であるが、鳥が減少していると言われている昨今考えさせられる問題を含んでいる。

次に、就峙活動についてふれる前に、峙と巣というものははっきりさせておきたい。鳥によっては峙と巣が同一のものもあるが、巣とは、種族保存を目的とした産卵抱卵、育雛の行なわれる場所であり。峙とは、ある種の鳥が単独、或いは集団で一夜を完全に就眠する場所であるムクドリは、蕃殖期の一部を除き年間、群生活を営む鳥で、就峙は、季節により大小あるけれど常に集団で峙る又峙も季節により代える。そこで、その交代から一年を大きく春型峙(1~7月)夏型峙(7~11月)冬型峙(11月~)の三つに区分する。これも、毎年、はっきりこの三つに分かれるというのではなく、時により一つの峙が冬型峙と春型峙に使用される事もある。こゝでは具体的な細かなデータは割愛させていただく。まず、春型峙として使用される植生は、全て竹であるが、冬期も良く繁り、寒風を避け、自分の身を隠す場所、即ち保温と安全を満すものと言えば竹林以外ないのである。前にもふれ

たが、蕃殖期の進行と共に今までの冬型峙(善光寺平野では、蕃殖場所から30Km以上離れている事もある)へは、帰峙せず蕃殖場所になるべく近い竹林が蕃殖期中の峙、即ち春型峙として使用され初める。蕃殖場所は各地に点在しているため、ムクドリもその蕃殖場所に近い春型峙へ分散してしまい、そこへ集会する羽数も少なく小さな就峙群になる。故に春型峙は、あまり発達した竹林を必要としない。このような竹林なら数多く分布しており春型峙は、竹林の数だけあると言っても過言でない位、数多く分散する。例えば、川中島平だけでも、現在、15ヶ所以上も発見している。親鳥は雛が巣立つまで雌雄共に巣に近い春型峙で就眠するため、それは、6~7月まで使用せられ、雛の巣立ちと共に夏型峙へ移動するので巣立ちと共に次第に減少してくる。巣立ち時期は、色々な条件、例えば、地域差や巣の横取りごっこなどにより各巢毎に多少の差があるけれども、大体北信地方(川中島平)では、6月初旬から中旬が最も盛んである。夏型峙は、蕃殖を終えた各地の親鳥と巣立ち雛が集まり蕃殖期の終了する6月下旬まで、増加してゆきそれ以後、11月初旬まで大きな変動のない安定した状態が続き、就峙数も春型峙よりずっと多く(善光寺平野に於ける夏型峙は、5千羽以上の規模のものがいくつかある)なり、活気に満ちた峙社会を構成する。夏型峙の植生は、ニセアカシア、カワヤナギ、アジが主なものであるが、これらは全て落葉樹であるため、初雪がくる11月初旬には、落葉も次第に進み、突然冬型峙へ移動してしまう。冬型峙は、いくつかの夏型峙へ就峙したムクドリにより構成されるので、その規模は夏型峙より更に大型になり、三つの型の峙の内でも最大規模なものとなる。植生は春型峙と同じ竹が使用される。善光寺平野の例では、羽数も万を越すため、その竹林も非常によく発達したものが使用されている。冬型峙は、時期的に蕃殖期前に控えているためにその使用期間は短く、1月下旬頃より春型峙への交代が次第に減少してゆく。

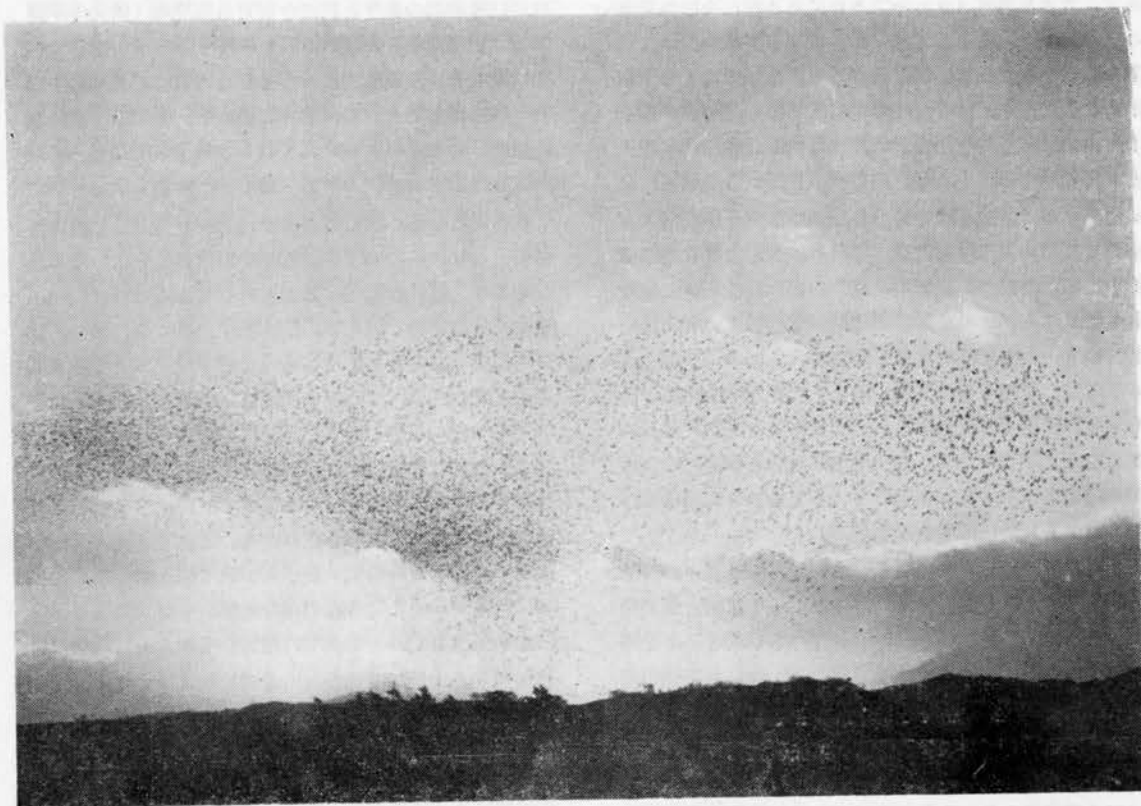
季節的に、このような交代を繰り返す、毎回特定の峙へ集団で峙り、朝になると各々の採食地へ向い、夕方になると再び同じ峙へもどってくるのである。一口にこのように言ったが、ムクドリには、採食地から峙へ入るまでに独特な過程があるので、それを紹介したいと思う。

ムクドリの就峙過程

1. 採食地出発
2. 帰峙前集合
3. 帰峙飛去
4. 入峙前集合



運び落された卵 61.5 川中島町にて



ムクドリの大旋回

休止、合同採食、水浴、旋回など

5. 入塙
6. 就眠前騒鳴
7. 就眠

全てのムクドリが必ずこの過程をたどり塙へ就くというのではなく、中には採食地から直接入塙してしまうものや、入塙前集合してしまうものもある。又この過程も時期より早かったり遅かったりする。この様な違いは、その時の照度、食物の摂取、天候、気温、季節、塙までの距離などの条件が重なり起るようである。まず、採食地出発であるが、ムクドリは繁殖期以外終日、数羽から数百羽で群生活を営み、餌を求めながら移動しつゝ夕方になると帰塙前集合所へ飛び立つ。黒田先生の研究によると、日没前84分(10000Lux以上)から13分(約1000Lux)の間で行われる事が報告されている。採食地出発の時刻が遅ければ遅い程、途中の過程をふまず、塙へ直接飛び込むものが多い。採食地を出発したムクドリは帰塙前集合所へ向うのである。この集合所は、囲りの建築物や自然物などより一段と高い、例えば高圧線、鉄塔、高木などで各地に数多くある。帰塙前集合所を出発してから入塙前集合所へ着くまでを帰塙飛去期と呼んでいるがこの時の群は、屋間の群よりかなり大きく、塙へ向って

一直線に高い上空を「チッ、チッ」と鋭く鳴きながら飛去するので、その時の飛翔状態ですぐ解る。入塙前集合所は前の集合所とは多少異なり、塙の近くのムクドリの集合する色々な環境で、休止、合同採食、水浴、旋回などしつゝ次第に集団が大きくなって、その後入塙するのである。この入塙という過程の現れる時間も季節による差が大きく、育雛期が年間通して最も遅くて最終入塙が日没後47分、餌の少ない2~3月は、日没後42分である。その他の季節に於いては、遅くも日没後30~35分には完全に入塙し終る。最終入塙以後2~11分位は、けたましく鳴き騒ぎ、塙内の移動も盛んに行われているが、それ以後は、鳴声も移動も全くなり就眠に入ってゆく。真夏の夜のむし暑い時には、入塙直後のような賑やかさはないけれども一晩中、くぜり鳴きを続けているようである。このようにして、翌朝の離塙前騒鳴まで今日一日のとばりが静かにおろされてゆくのである。

(信州大学教育学部学生)

南アルプスに植物を追って (2)

中村 武久

前日までくずつきがちだった天候もやゝ落ち着きをみせてこの日は朝から、からりと晴れ上り小屋の外に出れば南側の空にくっきりと高く赤石の山塊がせまっている。そこそことごったがえした昨夜の荷物をまとめ早期に出発比較的なだらかな斜面の途を登って、荒川岳と赤石岳の鞍部、大聖寺平に出れば、南アのうちで最も素晴らしい眺めかと思われる程のみごとな景観が視界をうすめつづけている。これから登る前方を仰げば、今まで小赤石のかけになっていた赤石の本岳がその名の如く朝日をあびて益々紅く映えている。そしてその前方にはこれから踏んでいく大沢岳、中盛丸岳、兎岳、聖岳の山塊が次々と並び、いずれもかなり上部まで緑にうずまるその山容は我々の期待を益々ふくらませる。一方いままで歩んできた後方、北の空には鋸の歯をおもわせるような峨々たる荒川岳の雄姿が足もとの尾根につづく。また荒川の頂上から東に延びる尾根は、昨日の天候が疑われんばかりにくっきりと静かに聳える東岳に連なり、なおそれは千枚岳、マンボ沢の頭へと続いている。荒川岳の東に延びる尾根を越へてやゝ遠くには塩見岳の特異な姿が望まれ、またその向うに間ノ岳も浮んでいる、また過去に想い出多い三伏峠の辺り、豊口山もまだ朝の日をあびずに黒く横たわっている。こうして次第に目を遠くにうつせば、伊那谷をへだてて中央アルプスの連山が峯々を朝日に輝かせてみごとに連なる。そしてその遠く北方の空には北ア南部の山影もかすんで望まれる。あまりにもみごとなこの景観に心奪われ、自分の存在をしばし忘れてしまうこの瞬間ばかりは情緒にうとい我々の心も完全に山の中に溶け込んでゆく。小一時間をこうしてついやしやがて我にかえって周囲の植相観察を始める。

赤石岳の植物については古く小泉秀雄氏等の記録から実はかなり大きな期待を寄せてきたので、ここでの観察時間は幾分余裕をとっておいた。然しこの辺りハイマツはよく発達しているが、ハイマツの間に広がる礫地にはタカネマツムシソウ、ヒメコゴメグサ、コケモモ、ウラシマツツジなどが生える極めて普通の乾草原で、その期待を満してくれるものは殆んどない。それでも上に登ればと思いつながら小赤石の登りにかかる。小赤石と赤石岳の鞍部附近はやゝ草地も豊富になるが、ここでも何一つ目星いものは出てこない。赤石岳の登りも殆んど同じ小さな期待の目を周囲にくばりながら登る間に赤石の山頂に着いてしまった。山頂部は植物どころか名の如く赤味を帯びた岩や礫がところせましと重なり合い、ここではハイマツの群落もあまりよく発達していない。しばらくの間山頂部附近を歩きまわる。しかし予期に反してこれ



小赤石岳への途中から百間平、大沢岳、中盛丸岳、兎岳方面を望む

と思う草地はどこにも見当らない。誰が悪いのでもないが独り寂然としないうまゝ諦めて昼食をとることにしたこんなことならここでゆっくりしていこうというわけで若い辨田君と北原君の二人は早速さつき登る途中に見えた雪渓まで下りて雪をかつき上げてくる。これを鍋にかけて水を作り御馳走を作る事にした。僅かではあるが通りすがりの登山者は、この我々の意味ない盛大な昼食に奇異の目を向けたに違いない。今思うに全くばかげている

こんなことで必要以上の時間をついやしたが、やがて下からあがってくるガスに夕方の天候を知らされ、やゝ濃くなったガスの中を赤石岳の南斜面に下る。ここでもかなり時間をかけて方々かけずりまわったが、矢張りこれと思うようなものは何一つない。殊に私の目的のシダなど何一つみあたらず、たまたま仲間の一人、小杉君がガスの中で「リコポディウムがありました」と叫んだのがこの山での唯一のシダであった。なお物足りぬものを感じながらやがて広く開けた百間平に出る。名の如くこの平はまことに広い。かつては湿原ではなかったろうかと思われるような平坦な草原でハナゴケなどの地衣が多い。こゝで出合ったキツネの姿に、オオカミ論議をかわしながら急な斜面を下って百間洞へと向う。この谷間の上部はダケカンバの林に囲まれたお花畑があり、ここには植物もかなり豊富にある。殊にタカネコンギクやトモエシオガマの群落は北アではみられない光景である。こんな植物の姿に気をとられながらも、雨がパラつき始めたので、流れの近くのテント場に急いでテントを張るが遂に間に合ずあっと思う間に滝のような雨となってしまった。ぬれながら張り終ったテントのなかに雨をさけたが10分待てど20分待てど止もうとしない。これじゃ食事は

おろかこのポロテントでは一夜を過ごすことさえ案じられる。しかたなく雨の中、テントを捨ててそこから20分ばかり下った百間洞へと走った。ところがここは小屋の小さいところへこの雨とあって昨夜に増して超満員、どうしようかと山小屋の主人と話している間に雨はだんだん小降りとなってやがて止んでしまった。結局小屋の近くへテントを下げてくることで、ようやくここでの一夜を送ることができた。

翌朝、食事の準備をしながら採集品などを整理する。期待した赤石岳での収穫よりこの谷間での収穫の方がはるかに多い。それどころか標本を整理している間に思わぬ光景にぶかったのである。南アルプスではよくみかける腹の赤い大型のヒル、時には樹幹に群棲することもあって甚だ気味の悪いやつだが、これがミミズを飲むとは考えてもみなかった。ところがこれが自分の体の3倍はあろうと思われる程のミミズを飲み始めたのだ。もちろん長時間のうちにミミズは自らの体を切って逃げのびたが、全く専門外のこととはいえ珍らしい光景だった。植物ならぬ動物の収穫にやゝ満足して百間洞を後にした大沢岳の鞍部に登り、ここからまた尾根すじを中盛丸岳小兎、兎岳そして今日の最後の山聖岳へと向った。いずれの山も山頂部は殆んど同じような植相で極めて貧弱、前日大聖寺平から眺めたときの期待はくつがえされてしまった。それでも各山塊の鞍部、それも殆んどが信州側に切れ込む断崖の岩壁に限られるようだが、ここには僅かみる可きものがあるようだ。しかし岩壁であるだけにロック・クライミングでもしない限りとても近づくことはできない。殊に前年の小白峯の岩場における今だキモを冷す体験が、あえてそこに近ずこうとさせなかった。幸い携行した双眼鏡でその植物の概要に触れたのがせめてもの慰みである。ここにはオオビランジ、シコタンハコベ、イワオオギ、シロウマオオギ、トウヤクリンドウ

イワヒゲ、アサギリソウ、ミヤマオトコヨモギ、イワインテン、ミヤマダイコンソウ等々、北岳八本歯辺りや、東岳、千枚岳鞍部辺りの豊富な植物相に匹敵するかと思うくらい割合種類が多いようだ。やがて聖岳につく、頂上についた時は視界〇、風は強くとても植物どころではない。僅かの時間風をさけてハイマツのかげに休み、全く植物的でない聖岳南面の砂礫地をすべるように下りる傾斜がややゆるやかになる辺り多少植物も数を増してくるが、それにしてもミヤマアキノキリンソウ、クモマニガナ、イブキジャコウソウなどの普通品ばかりで、僅かにヤハズヒゴタイが散見するあたり南アの香りがあるだけだ。

こんな尾根すじ長い時間降りるとやがてシラビソやダケカンバなどの喬木が現われる。この辺りまで下るとさすがに植物は多くなり、林縁にはオオバショリマ、モミジカラマツ、ミヤマコウゾリナ、シモツケなどが現れ、林床にはシノブカグマ、セリバシオガマ、カニコウモリマイヅルソウなどの深山性のものが多くなる。やがて聖平に近くなる辺り、アザミ(ヒメアザミ?)が極端に多くなり俗に呼ぶアザミ畑の名の通りその群落はまことにみごとなものである。正確に調査はしなかったが個体密度4.50本/1㎡はあろうかと思われる。しかも栄養がよいのかいずれもその生育はみごとなもので、大きいものでは茎の径3cm丈2mに及ぶものもある。残念なことにこのアザミなお検討中で正確な種類が判明してないが、食用としては大変上等で、事実聖平での夜の食卓はアザミの天ぷら、アザミのお浸し、そしてアザミの味噌汁とアザミオンパレードでにぎわした。

翌朝、まだ明けぬうちから降り出した雨は朝食をとる頃に益々強くなり、雨と風がまじるようになって来た。次の目的地仁田池まで、行く可きか、聖尾根を下る可きか論議の末ここから南の山は次の機会にゆずることにして荷物をまとめた。

想えば今回のこの山行きは始めから計画があつて無きが如き極めて気ままなものだった

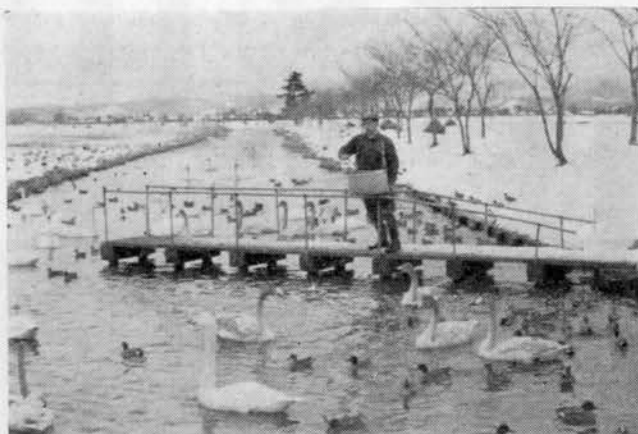
こんな山行きは、山登りとしては失格であるかも知れない。しかし反面最近の山登りには計画にしばられ過ぎたものが多いのではなからうか、その点この私の山登りは植物という目的、仕事があるにせよ、山を山として充分に楽しめるものにして自負してははかからない。また南アルプスこそこれができる残された山であるかも知れない。聖尾根の下り途を、ときどきこんなことを想いながらお囲りの植物に気をとられ、再び下界の人となった。(山博嘱託学芸員、東京農大附属高教諭)



ヒルがミミズに吸いついた光景—百間洞にて—

大白鳥の湖瓢湖を訪ねて

長 沢 修 介



通り過ぎる町や村はすべて雪、雪で何処迄行っても白の世界であった。出発する時から少々ちらついていたのが県境の辺りからはげしい降りとなり汽車の接続なども心配されたがそれでも予定通り水原の駅に着いた。

すっかり疲れて下車した水原の駅頭はしめり気の多い雪が風に乗って吹きつけていてちょっと出鼻をくじかれた感じがした。でもせっかく来たのだから写真の一枚だけでも写して行こうと天候の快復を望み空を仰ぎつつ街に入った。街に入ってまず目についたのは電柱につけられた道標であった。湖水と白鳥の絵を描きそこに矢印をつけ「白鳥の湖へ」と書き何分と記入してある。登山路や有名観光地などにはよくこの様な道標を見かけるが鳥の渡来地にこのようにしてあるのは始めてであった。それは町の人々全体の白鳥に対する関心がいかに高いかを物語っている様に思えた。

細い小路に入り軒なみが終った所でひょっこり湖水に出た。まず目に入ったものは大きな白鳥のブロンズ像とその辺に悠々と泳いでいる大白鳥の姿であった、その美しさに見とれしばらくは何も出来なかった。それは幼い頃に見た絵本の中にあるおとぎの国の絵物語に似ていたやと我に返ってカメラを出したもののこの美しさは到底写し得ることは出来得ないだろうと思われた。それでも二三枚を取めて餌付けの親故吉川氏の御子息繁男氏のいる監視所へいろいろの話をしてもらいに掛けた。瓢湖は正確に言えば新潟県北蒲郡水原町にあり羽越緑水原駅の東方約1500m位の所にある灌漑用水池で大体四角形をしており8.65ヘクタールというから大きさの点からは池の部類に属する。湖水の南西側には湖水にそって人家があり又県道もあってバスや自動車通っている。北側のほとんどと東側は土手で囲われており周りは田園である瓢湖という名前は昔池が作られた時は東方に小池があっ

て両方の境がくびれていた所から生れたと言うが今は東方の小池は埋め立てられてない。湖の水深は深い所で2m位で東南と東方面は浅瀬になっており水性植物が良く繁茂しておるそうで今は鴨や白鳥の休息所にもなっている。又白鳥のために湖の中に二つの人工島も作られ鳥達の良い休息場所となっている。

瓢湖は地形的にも恵れた場所にあり、約7Km西には阿賀野川が大きくうねっており、北方6Kmには約300ヘクタールの大きさを持つ福島潟がある。又西方15Kmには信濃川が、北15Kmで日本海に達する。そのため昔からこの湖には多くの水禽類が来ていたらしく大正10年頃から水禽類の

保護池として又昭和5年頃も毎年10羽位の白鳥が来ていたという。所が戦争は人間界ばかりでなく自然界へも大きな波紋を及し、ついに鴨や白鳥達にとってもここは安住の土地ではなくなりもっと大きい福島潟の方へ移動を余儀なくされた。戦後世の中も平穏になりようやく20年振りの大白鳥の渡来となったのは昭和25年であった。25年2月6日8羽が着水間もなく飛び去ったが、翌9日に再び6羽が訪れたのを見た吉川老人が最速町役場や有力者に働きかけ自からその保護に日夜を分けず当たったのが現在の平和境の始まりである。

この年から毎年50羽位が40日～50日の間滞在する様になった。渡来5年目29年になって吉川老の念願であった餌付けに成功したのである。この時大白鳥にまじって来ていた2羽の白鳥のうち1羽が吉川老のまいたしいなを目前で食べ始めた。これにつられて大白鳥もついに餌場集る様になったという。しかしこれまでにするのは大白鳥の好きなものは何か調べるため大きな鍋にいろいろな餌を入れて鴨ではとどかない深さの所に沈めておいて調べたり、餌台になわをつけて流したり色々な方法が試みられた。結局観察にも一番よいしいなを用いて「コーイ、コイコイ」と大声で呼んでしいなを投げるようになった。又服装も常に同じ物を着、黒のジャンパー、茶のズボン、ゴム長に取付帽をかぶり胸には餌籠をかけ、毎年同じ服装で湖岸に立つことにしていた。

又呼んだ時には必ず餌を与え、風向や周囲の状態なども充分に考え細心の注意を払ったという。吉川老は「動物を信用させるためには一度も騙してはいけぬ。又終日白鳥と共にいて自分が白鳥になり切ることが大切です」といつてもそうである。その通り自分も実行して朝早くから夕方遅く迄いつも湖水におり白鳥と共に過して来た。そのため年々馴れついに吉川老が岸に姿を現すと



ついて歩く様になった。又家族の人達も良く協力され餌あつめに野菜のくずや茶がらをもらい歩いたという。この様にして本当の愛情が実を結び今日の野生鳥と人間とが一体となった美しい光景が生れたのである。ただ不幸にも吉川老は白鳥が渡来して11年目の年はいつもの年より早く白鳥が姿を見せたがこの白鳥が着水しないうちに脳出血で急逝された。この後を長男の繁男氏が立派に受け継がれ現在やっておられる。さて話をしているうちに時間になったからといって餌籠をさげて出て行かれた

「今日は風が北から吹いているから全部こちら側に来ていますが一度向う岸に呼び又こちらに呼び戻します。」と言われて向う岸に向われた。我々もさっそく外に出て見ると早いものは姿をみつけてもうそちらに向っていたやがて向う岸で「コーイ、コイコイ」と大声で呼ぶと寝ていたものや羽づくろいをしていたものも一つせいにあの長い頸をのばして方向を定めそちらに向って泳ぎだすそして「コーイ、コイコイ」に答えて「コーコー」と鳴きながら泳ぎを早めついには羽ばたいて飛び立ち一直線に飛んで行って着水し吉川氏の投げる餌を食べていた。

この光景は真に壮観そのものである。誰しも嘆声を発せずにはおれない光景であった。大勢の観客もただこの美しさに見とれていた。この白鳥と共に多くのコガモが同じ行動を取っていた。又も一度今度はこちらの岸に呼び寄せられたが本当に目を見張る美しさであった。話ではとても信することの出来ない本当の人間と野生鳥との一体になった世界である。この美しい光景を見た我々は何か暖い心の満ち足りた感じがして帰路についた。

(山博調査員)

1968年冬季オリンピック八方尾根招致運動は途方もないデッカイことで、そんなことが実現出来るか。と一笑にはされたこともあったが15日の新聞によるとシヤモニー共同特派員発でF I S国際アルペン・スキー大会日本代表西野団長が2月12日夜のF I S総会技術委員会に1968年冬季オリンピックに日本が立候補する旨口頭で申し入れ、これが受理され1964年冬季五輪組織委員長ウルフガング氏が3月中旬から4月にかけて下見に訪日することになったと伝えている。日本の開催候補地としては札幌、日光、軽井沢をふくむ志賀高原、苗場、八方尾根の五ヶ所、同氏の来日後資料をととのえて正式届け出をするわけだが、とにかく八方尾根が候補地にあげられたことは実現に一歩近づいたことで喜ばしい。

灯台もと暗しのたとえのように地元ではそのよさは、
判らないものだが国内5候補地

私は思う

の比較検討は既に関係者で行なわれている。元オリンピック・スキー選手竹節作太氏は5候補地をつぶさに視察、研究、調査その結果を公表しているが、なんといっても第一に交通の便をあげている。東京を中心にした5候補地の最短距離では日光が地図上では近く見られるが実際の鉄道、バスなどの乗車利便を勘案すれば東京-信濃四ツ谷間の鉄道利用と大差なくまた信濃四ツ谷駅から会場まで処用時間5分(舗装道路となった場合)は天下一だという。コースその他劣る点はないという折紙である。しかしノールウェー、カナダ、フランスなども立候補、また近くソ連も立候補すると伝へられる。最後の決定までは容易なことではない。博物館が提唱している針ノ木自然園は最初夢物語りだとか絵にかいた餅だとか悪口をいわれたが八方尾根同様地理的条件とその素質は将来大きく伸びるものと確信が持たれ、オリンピック招致とともにたのしみである。

(古川潔)

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料200円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第7巻第2号 1962年2月25日発行
発行所 長野県大町市TEL(大町)211
大町山岳博物館
印刷所 大町市上仲町
信州印刷大町工場